

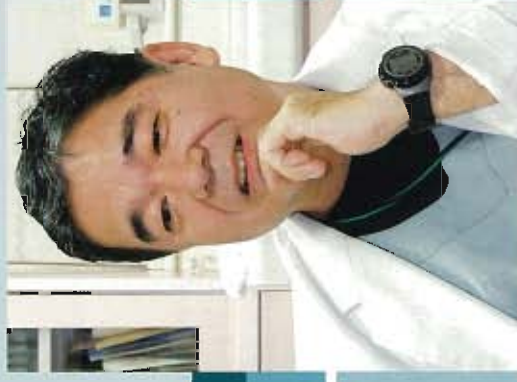
## 高画質画像と携帯性で、 必要不可欠なパートナーに。

地域医療に貢献する乳腺専門医とともに、  
超音波診断装置ファゾン エムが活躍しています。

### 導入事例紹介

## User's Voice

### 高野せきね外科・眼科クリニック 院長 関根 智久先生



### POINT

- 乳腺診断をサポートする高画質画像
- クリニック内・往診先で活用できる携帯性
- 患者さんのストレスを軽減する短い起動時間

### 開業医として、乳腺専門医として、 地域医療に貢献

かつては城下町として、現在では温泉地として知られる山形県上山市。人口は、約35,000人。市の中心駅である「かみのやま温泉駅」は山形新幹線の停車駅であり、また同県の県庁所在地・山形市に隣接するなど、交通アクセスにも恵まれた土地である。

このエリアの地域医療に尽力している医師がいる。高野せきね外科・眼科クリニック院長 関根智久先生がその人だ。平成10年、「かみのやま温泉駅」近くに同クリニックを開業。以来、開業医としてのみならず、乳腺専門医として市内の総合病院での勤務にも従事している。近年、先生の診断領域は一段と拡がりを見せており、産業医、学校医、警察医、スポーツ医としても活動。さらに、乳がん早期発見のための啓蒙活動「ピンクリボン」への参加・講演会の実施など、休む時間

のない日々が続いている。

「私には、乳腺専門医としての責務があります。開業したからといって、メスをもたなくなるといった訳にはいかない。ただでさえ、県内の乳腺専門医の数は受診者に対して圧倒的に少ないという現状があります。と同時に、開業医としての役割も大きいと自負しています。他の地域社会と同様に、上山市においても高齢化が急速に進んでいきますので、内科・外科が急務に進んでいきますので、「地域のお医者さん」はやはり必要でしょう」

クリニックには、毎日70人ほどの地域住民が診察に訪れるという。また、オープン病院として活用している「みゆき会病院」では、平成11年以降、450例を越える手術(胃ろう・PHS・痔ろう・乳がん

ど)を実施。同様に出張勤務をしている「小白川至誠堂病院」では、平成10年以降、乳腺専門医として220例を越える手術(乳腺・甲状腺・頸部など)を行ってきた。「執刀医を求めめる総合病院」と「高い専門性を持つ開業医」。上山市の医療環境は、強い地域連携によって支えられている。

### ファゾンエム、導入 決め手は、高画質画像と携帯性

平成20年3月、クリニックにファゾンエムを導入。その理由についてお話を伺った。

「まず、画像がいいこと。これが一番の導入理由でした。私の場合、乳腺・甲状腺をはじめとする表在エコーはもちろん、腹部エコー・心エコーなどさまざまな箇



高野せきね外科・眼科クリニック外観。



受付には、朝早くから多くの患者さんが訪れる。

所に超音波診断を使用します。その際、総じて大切なことは、鑑別しやすい画像で診ることです。超音波画像によって最終的な診断を下すことはしませんが、画像の質が高ければ高いほど、診断の精度は上がります。インプレッションの度合いが増すといえます。その後の確定診断へとスムーズにつなげることができ、導入後に疾患の検出率が高くなるわけです。ファゾーン エムの画質の高さを示していると言えますね。疾患の早期発見にも貢献しているとも感じていますよ」

ファゾーン エムのスキャンエンジン部「ブレイン」の携帯性については、どうだろうか。

「以前、携帯用として使用していた超音波装置は、重量が20kgほどありました。それに比べてファゾーン エムは圧倒的に軽い。この軽さであれば、施設や在宅へ気軽に持ち運ぶことができますから、その点でも導入メリットを感じています。また、クリニック内においても携帯メリットがあります。ファゾーン エム本体は外来診療室に設置しているのですが、マンモグラフィ装置は別の部屋に設置しています。マンモと超音波を併用する場合、ブレインを持ち運ぶことで、患者さんは部屋を移動することなく、同部屋内で診断を受けることができます。歩行が困難な高齢者の方に対して移動をお願いする必要がなくなっただけです」

現在、先生は表在用・腹部用の2種類のプローブを使用し、乳腺、甲状腺、腹部大動脈瘤、胆石など、幅広い診断にファゾーン エムを活用している。

「もう一点、起動が速いところもいいで



外来診療室に置かれたファゾーン エム。

すね。患者さんにとって、待つ時間は不安な時間であると言えます。ファゾーン エムは起動時間が短いため、触診で超音波の必要性を感じたら、すぐに検査に移ることができ、患者さんのストレスを軽減できたのではないのでしょうか」

「特に30、40代の方のマンモグラフィ画像は白く映る傾向にあるため、超音波画像のほうが診やすいと言えます。また、これからは、超音波診断により乳腺の状態をカテゴリー分類する時代になるでしょう。乳腺専門医の私にとって、画像のいい超音波装置は必要不可欠なパートナーになるはずですよ」

## 決して見逃さないこと 裏切らないこと

東北地区でファゾーン エムを導入したのは、同クリニックが初めて。最新機器を積極的に導入する姿勢は、どのような考えから生まれているのだろうか。

「私の医師としての信条は、見逃しは絶対に行きたくない、ということ。疾患を見逃すことは絶対に行きたくない。見逃しさえしなければ、迅速に手術などの処置を行うことができる。つまり、治る確率が上がるのです。見逃すということは、つまり患者さんを裏切ること。それだけはしなくありません。最新機器を導入する理由は、少しでも診断の精度を上げることができれば、という思いからです」

先生が上山市にクリニックを開業して約10年が経過した。現在、上山市における対人口比での乳がん検出率は、他の地域に比べて高い数値を示しているという。この事実が、地域医療への先生の熱い気持ちを裏付けているのではないだろうか。



患者さんと対話をしながらの腹部エコー。視認性の高い画像が、診療の効率化に貢献。



X線・マンモグラフィ撮影室での超音波検査。ブレインを簡単に持ち運べるため、同部屋内で超音波検査が行えるようになった。



ブレインとともに往診へ出かける関根先生。



FAZONEM

診療室での検査には「スマートカート」、ベッドサイドや往診時には「ブレイン」の二通りの使い方ができる超音波診断装置です。